

進捗状況の概要（2 ページ以内）

① 大学改革の加速

テーマⅠに関して、生涯に亘って創造的な思考と責任ある行動を実践し続ける考動人（Lifelong Active Learner）を育成するために、特に初年次教育におけるアクティブラーニング（以下、AL）の充実を図っている。該当科目は今年度 5932 件へと増加（対前年度比 1.3 倍）、初年次学生対象科目ながら大学の全科目数（11732 件）の過半を占める。AL 型授業を実践する教員は 654 名に増加（専任教員の 94.2%）、当該科目の履修学生（28816 名）は在籍者の 99.8%に達する。AL 型授業の学修成果と学修支援スタッフの活動報告会を年に複数回開催し、AL の量的な拡大のみならず、質的な充実も目指している。また、夏季休業期間にはこの報告会に高校生を招き、秋学期には AL に取り組む高校生を研修会に招く等、AL の裾野を高校生にまで広げて、学びの転換がスムーズに行われるように配慮している。学生と社会人あるいは高校生が参加するワークショップ（以後、WS）を継続して開催しているが、新規参入を望む声が複数寄せられるようになっており、これらの声には前向きに対応している。本取組において刊行する AL 読本の第 4 弾として『未来を切り拓く交渉学』を発刊した。社会人基礎力を鍛えるべく開催している交渉学 WS のコンテンツを整理し、交渉学を効果的に活用するための内容と方法をより多くの教育関係者に伝えることが可能となった。とりわけクリティカル・コミュニケーションを展開し、サーバント・リーダーシップを発揮する学生の育成に資することが期待される。昨年度に引き続き、PAL（Peer Assisted Learning）を支える学生スタッフの活動について報告・討論するフォーラムを開催した。本学の LA（ラーニング・アシスタント）と同様の制度を有する大学が一堂に会し、情報交換や新しい知見の創出など、大学間連携がより確かなものになっている。次年度の開催も既に予定されているが、複数の大学による学生スタッフ研修会の開催も視野に入れている。

テーマⅡに関して、AP 事業によって、学修成果を的確に可視化することを目的に学内に立ち上がった教学 IR プロジェクトは、学士課程教育を中心とした教育プログラムレベルにおける学生の学びを可視化するため、DP に対応する「考動カコンピテンシー」と「考動カベンチマーク」を開発した。「考動カコンピテンシー」は、大学全体および各学士課程教育の DP に含まれ、学士課程教育をはじめとする教育プログラムの中でアセスメントすることが重要であることから、学修到達度および学習行動を含む間接評価として 5 つの学生調査を開発した。入学時から卒業後までのプロセスを明らかにする学生調査は、学士課程教育の現状に合わせた独自項目およびファクトシートの設定、また分析結果を教授会等にてフィードバックするなど、ミドルアップ型内部質保証をシステム化した。これらは第 3 期認証評価においても長所として評価されている。

「考動カベンチマーク」は、特に初年次教育および卒業研究を中心としたルーブリック開発の基盤となり、本年度は 213 数のクラスルーブリック開発に至った。これらアセスメントは、すべて教育の主体である教職員組織に定期的にフィードバックおよびディスカッションすることにより、エビデンスを基盤とする教育改革の文化が醸成した。また学修成果を可視化したのち、それらを教育改善に活用していることも大きな特徴である。特に学習支援としてのライティングラボとの連携や、教務センターでの履修・学習指導などに活かされている。

② 事業の実施体制

学長のリーダーシップの下、AP プロジェクト委員会を設置し、全 13 学部および関係機関（キャリア・入試等）と連携して本事業を推進している。教育推進部長（副学長）が事業の全体を把握し、教育推進委員会を通じて全学部にて報告・審議・承認等を行う体制を構築している。

③ 事業の実実施計画・継続性

テーマⅠに関して、能動的学修を支援する学生スタッフの大学間交流を継続的に拡大するために PAL フォーラムを定期的で開催するとともに、複数の大学が連携した学生スタッフの合同研修も視野に入れている。交渉学 WS は複数の企業あるいは高校との共同開催を継続するが、それぞれ新規参入を望む声にも対応する。さらに後者においては高等学校より要望のあった中学生の参加を視野に入れる。交渉学ならびに AL の普及に関して海外の大学との連携も継続して展開していく。

テーマⅡに関して、教学 IR プロジェクトは、関西大学の内部質保証システムの中に位置づけられ、関西大学全体の学修成果の可視化を担当する部署となった。教育推進部長（兼副学長）のマネジメントのもと、学長補佐以下、入口から出口まで学生が関わる組織のメンバーが 22 名のプロジェクト委員と 33 名のワーキンググループメンバーに分かれて弾力的に活動している。入学直後の 4 月に実施する入学時調査からスタートし、年度末卒業式時に行う卒業時調査まで 5 つの学生調査をほぼ全数調査として実施する他、各学士課程の『ファクトシート集』の開発およびフィードバックをシステム化することによって、ミドルレベルの内部質保証システムにも寄与している。アセスメントプラン、アセスメントポリシーの毎年の見直しも行っている。また考動力ベンチマークの開発により、特に初年次教育と卒業研究における資質・能力に関するルーブリック評価も定着している。

④ 事業成果の普及

テーマⅠに関して、本学と同様に、能動的学修を支援する学生スタッフ制度が複数の大学に導入され、本学との交流がさらに広がり、また深まっている。それと共に、同種の制度を持つ大学が一堂に会して情報交換等をする PAL フォーラムに新規に参加する大学が増え、裾野が広がっている。当該大学が連携して（加えて新規参入希望大学も受け入れて）学生スタッフの合同研修を近年中に開催してほしいとの要望が複数の大学より寄せられている。大学と企業あるいは高校が共同開催する交渉学 WS は継続開催のほかにも新規参加を望む声があがっている。

テーマⅡに関して、学生調査の重要性や学生の学びを見取ることの重要性は、毎年、各部局へのフィードバックを通じて学内に広まっている。事務局ミーティングや各学部教授会、さらにはポスター作成による学生への周知を通じて、教職員および学生という大学の構成員全員が学生の学びの状況を把握できる状況になった。また学外でも、教学 IR が機能していない大学が多い中、本学のように各学部のサポートを行うミドルアップ型による内部質保証の在り方が注目され、第 3 期認証評価でも高い評価を受けたことから、ヒアリングや講演依頼を受けている。

⑤ 選定されたテーマの取組を中核にした総合的な大学教育改革の取組

テーマⅠに関して、考動人育成プログラムを担う AL 型授業科目・担当教員・受講学生のいずれもが増加し、本取組のテーマⅠに係る基盤が拡大・充実している。能動的学修を支援する学生スタッフの裾野が LA・TA・SA を超えてさらに広がり、学内では 29 の団体に亘り約 1300 名の学生が PAL に係わっている。彼ら彼女たちは、今後、準正課教育プログラムを展開する場合には、その中心的存在となることが見込まれている。社会人あるいは高校生を交えた交渉学 WS が継続的に開催され、その企画・運営に係る学生のプロジェクト・マネジメント力ならびにリーダーシップの育成が順調に進んでいる。

テーマⅡに関して、大規模私立大学でありながら、5 つの学生調査を設計し、特に入口・出口に関しては全数調査を行うことで大学全体および各学士課程の内部質保証システムを構築した。これらは日常的な改革の学修成果の可視化を担っており、学生の学びの状況を把握することによって改善への示唆を行うエビデンスベースの教育改革文化を醸成した。本取組が目指すミドルレベルのアセスメントデザイン（直接評価＋間接評価）は学内 AP により徐々に広がり、現在、全学部とアセスメントに関して協働体制を組んでいる。